

ドイツの言語と文化 第14回 文化パート9：学生発表第4回

範囲：教科書第十二章 (S. 182 - 207)

第11回から引き続き学生発表の回であり、事前に決めた分担の通り、教科書の内容説明は受講者にやってもらう。やはり、一部の事項に関してのみ、講師から補足しておく。

第十二章 共和国の最期 (S. 182 - 207)

プロイセンのクーデター (S. 184)

この事件は「**プロイセン・クーデター**」などと呼ばれる。

S. 185

- ・「プロイセンではこの年、大統領選挙の直後に州議会の選挙が行われたが」
…当時も現在も、ドイツの各州は（今日の日本とは異なって）議院内閣制で、州知事を直接選挙で選ぶのではなく、州議会で多数を獲得した政党から「州首相」と各閣僚が選ばれる制度である。
- ・「プロイセンは面積、人口ともに全国の三分の二を占める大きな州であるから」
…当時のドイツは、帝政時代の各**領邦**（王国、大公国、公国、自由都市…）をほぼそのまま州にしていたので、各州の規模は旧領邦を引き継いでまちまちであった。このため、最大のプロイセン州（プロイセン王国）が全国の過半数を占めるという、いびつな状態になっていた。

社会民主党と抵抗 (S. 186)

S. 188

- ・「マルクスの必然論」
…公式的なマルクス主義（**唯物史観**）では、社会はその折々の生産関係や所有関係の矛盾を原動力として必然的に発展していくものとされた（原始共産制→古代奴隷制→中世封建社会→資本主義社会→共産主義社会）。ただし、1920年代のヨーロッパでは、この必然論を見直す動きが現れはじめていた。
 - * ゲオルク・ルカーチ『歴史と階級意識』（平井俊彦訳、未来社、2018年の新装版など）、アントニオ・グラムシ『獄中ノート』（片桐薫編『グラムシ・セレクション』平凡社ライブラリー、2001年など）。
- ・「社会ダーウィン主義の進化思想」
…**社会ダーウィニズム**。ダーウィンの進化論を応用して人間社会の発展を説明する思想。ハーバード・スペンサーを代表に、自由放任経済を「適者生存」として正当化するイデオロギーとされることが多いが、社会主義者の陣営でもそれとは異なったやり方で導入し

ようとする試みがあった。

シュライヒャーの失脚 (S. 197)

S. 198

・「ヒトラーが突撃隊のレームを肅清したとき、シュライヒャーは [...] 親衛隊によって射殺された」

…いわゆる長いナイフの夜。 (⇒授業第13回配付資料 S. 1)

ワイマル共和国の終焉 (S. 199)

S. 199

・「一月三〇日に成立した新内閣は、首相ヒトラー、副首相パーペン、経済相兼食糧相フーゲンベルク、労働相ゼルテという右翼協力内閣であった」

…当初のヒトラー内閣は連立政権であり、ナチ党からは3人しか入閣がなかった（ヒトラー首相、フリック内相、ゲーリング無任所相、ただしゲーリングはプロイセン内相兼任）。

〈ブックガイド〉 (補足)

文庫、新書などで手軽に入手できる、似たようなテーマを扱った概説書を挙げておく。

・岡義武『**独逸**デモクラシーの悲劇』文春学藝ライブラリー、2015年

…もともとは1946年の著書で、教科書とほぼ同じテーマを扱っており（ただし分量が少なく記述は簡潔）、著者同士の立場の差が興味深い。併録論文「環境に関連して観たる十九世紀末独逸の民主主義運動」では、国民自由党（ヴァイマル時代の民主党や人民党の母体）を中心にビスマルク時代の民主主義政党史について書かれており、教科書の言うドイツの政党が「国民的機能を果たさなかった」（S. 205）前史を解明するものとなっている。

・リタ・タルマン『**ヴァイマル共和国**』長谷川公昭訳、白水社、文庫クセジュ、2003年

…フランス人が書いた、教科書とまったく同じテーマの本。教科書と異なって、経済、思想、文化（大衆文化を含む）についても触れられているが、もちろんフランス人的なバイアスを含む。別の角度からヴァイマル時代について見ることができる。

・石田勇治『**ヒトラーとナチ・ドイツ**』講談社現代新書、2015年

…どちらかというとも1933年以降のナチス政権をテーマとする本だが（その分野では最も推薦できる概説書ともいえる）、前半3分の1はナチス党から見たヴァイマル共和国の記述となっている。

連絡先など

講師のメールアドレス：tokan@nifty.com 講師のウェブサイト：http://hhasegawa.la.coocan.jp/

授業のサイト（配付資料あり）：http://hhasegawa.la.coocan.jp/lecture/2018/2018sitDeutscheSpracheundKultur.html